
仮面ライダー電王

諒夏

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダー電王

【NZコード】

N5644C

【作者名】

諒夏

【あらすじ】

姉妹がミルクディッパーでお茶をしていた所にリュウタロスが乱入。妹は姉が連れて去れて探すうちに良太郎と出会います。でも知らないという良太郎に彼女はぶつかったお詫びだけをして姉を探す事に。そこで不良少年に絡まれている所をモモタロスに憑依された良太郎が登場。でも彼女は実は…電王に連なるもの…電妃と呼ばれる存在でした。

新たなるもの……やの名作電紀（前書き）

助けてやつたら次はわけわからねえやつにあつちまつたよ。
あげくはイマジンが付いてて、時の列車で育つただあ～？

わけわかんねえよ！

おい、説明しろ、良太郎！！

新たなるもの……やの名は電妃

「黙つて引っ込んでる」

ボウヤ…

用があるのはその女のほうなんだからな。

なんかこの男の人、完全にイッちゃつてるって感じだし、なんかムカツク。

見下されてるっていうか、明らかに俺より下つて言つてる。

あ～～～、ムカツク。

「くそ、オイ、俺の後ろから……」「離れるんじゃない……って聞こえたような気がしたけど、そんなのどーでもいいじゃん。

かばってくれたのはうれしいけど、いつもいつのつて称に逢わないつていうか、大嫌いなんだよね、こいつこの男。

その男が言つてる言葉をとりあえず無視して、飛び出した。

スタートダッシュは得意なんだわ、私。

「てえ～～～やあ～～～～～～！」

おもいっきりパンチを食らわして、すぐに次の攻撃を受けられるよう準備して、足を振り上げた。

『グツ』

相手が思わずひるんだその隙に……

「くひえ～～ってんだよおー！」

必殺、かかと落し！！

ドカつて音がして、かえるを踏み潰したような声が聞こえた。
「絶対に許さないんだからあ～～～～～～！」
ぶつとばしちゃる。

相手なんてどうでもいい、こいつ、ムカツク。

事の起こうりは数時間前。

私の姉、紫闇と一緒にミルクティッパーってお店でお茶をして、化粧直しで席を立つて数分。
おかしいなと想つて観に行つたら帽子をかぶつた男の子が姉をつれて行つてしまつた。

「まちなさーーーい

追いかけたけど見つからなくて、とりあえずミルクティッパーに戻つてお金を払つて、外に出たら人にぶつかつた。

「ごめんなさい。」

私よりも派手にぶつかつてしりもちをついてしまつたいかにもひ弱そうな男の子。

こりや当然誤るべきだろつと想つて誤ると「僕の方こそ……」って誤つてくれた。

なんて素直な男の子なんだろつと想つたけど、姉を探すのが最優先

で…

「ねえ、この辺に帽子をかぶってる男の子で女の口を米俵みたいにかついた変な人みなかつた？」

「帽子をかぶつた男の人で女人の人を担いだ人？」

僕、見てないけど…

「そう…じゃあいいわ、ありがと」

怪我してない？

「…うん、大丈夫だと想うけど…」

「そう、本当にごめんなさいね。じゃあ急ぐから」めぐ

「あ、うん。」

その男の子と再会するのほ本当に数分後。

姉を探して町をさまよつてた時、運悪く、ガラの明らかに悪そうな男に絡まれちゃつて…

でも逢つたとき、なんか感じが違つたんだよね～。

ほわ～～って感じがあ、～～～？って感じに。

「つていうかマジムカツクんだけど。あんた、鏡見てから出直しさいつて」

自分でもキレるとやっぱいつてわかってるんだけどね～。

でもさ、なんかむかつくんだもん。

どうにでもなつちまいやがれつてんだ。

つていうかちょっとぶつかったぐらいで『感謝料よ』せってどん
なに柔な身体してるわけ？

まったく、いい男がそういうこというわけないだろ？

人間の身体つつうのはそんなんで怪我するほど柔に出来てないんで
す。

そういう返したら突つかかってきて、相手にするのも馬鹿らしか
ら黙つてたら腕つかまれたんだ。

で、振りほどくのも面倒だから近づいてたら蹴飛ばしてやるつと
想つたんだけど…

青年がきて、その男の腕離してくれて後ろ手に庇つてくれたんだけど…

なんかね～～、どうもこいつも不良っぽいのよね～～。
まあ、助けてくれただけまともかも知んないけどさ。

でも、こうじうのはひ弱い女の子がされる事であつて、私は別に
ひ弱いわけじゃないから、
じつこののはぶつ飛ばすに限る。

うちの家訓。

『護られるより護る女になる事！』

つていうか突然叫んだと想つたら砂がこぼれてきてさ、
そいつから変なモンが出てきた！？

つていうか化け物っしょ？

現れた怪物は邪魔とか言って人のこと蹴飛ばしたんだよ？

女の子を。

マジ許さないんだから。

ぶつ飛ばしちゃる。

絶対に許さない。

「危ないよ、

さつきのほんわかした男の子の声が聞こえたけど知ったこっちゃない。

『んな攻撃通じな…』

「通じる方法知ってるつつの…！」

化けモンがなんかうつさいこと言つてゐるけど、知つたこっちゃないわ。

てえへへやあへへ。

うちの秘技中の秘技。

「空龍霸！！」

持つてたカードを敵めがけて投げつける。
で、イメージ通りに分散。

『！？』

「散れえ――――！」

拡散されたカードが相手を縦横無尽に切り刻む。
これがうちの秘技。

なんとかっていう奴が昔来て、これ、教えて行つたんだって。

『いつか、この世界が危機に訪れたとき、君たちは電王をサポートするため生まれた一族なんだから』って。

だから女だからって容赦しない。

これはさすがに人間相手だと殺傷能力ありすぎるからやらないけどさ。

「ねえ、こいつら、なんて名前？」

「…おい、良太郎…変われ」

俺、こいつ苦手だ

モモタロスが良太郎に選手交代して良太郎の人格が出てきた。

「えっと、彼らはイマジンっていうんだ」

「へへ、イマジンね。じゃ、異世界の化け物なんだ。」

「あなたは？」

僕は野上良太郎。

「私は紫栖諒夏。で、君が電王？」

「…一応そう呼ばれてる」

「じゃ、私はそのサポートする役目らしくてさ、えっと…でんき電妃でんひって呼ばれる」

ハナに視線をやると彼女は驚きに言葉も出ない。
そんなの聞いた事ない。

電王だって探すのに苦労したのに…

「オーナーからはそんなの聞いてないわ」

「僕をサポートって…」

「うちも契約者の一人だからね。」

「えへへ、君も？」

「つと、説明は後々、まずはこいつをぶつ飛ばす。」

”おい、良太郎、変われ”

モモタロスの言葉に良太郎は身体を引き渡した。

「あ、雰囲気変わったね、あんた誰？」

「モモタロスって呼ばれてるんだよ」

「おいで、アクア」

私のイメージも見せてあげるわ。

”じゃ、出ぬよおへ。”

諒夏から違つた声が聞こえた。

淡い光りに包まれて出てきたのは青い甲冑を纏つた女の騎士。

「アクアっていうのよろしくね、モモタロス。」

「ずいぶんイメージが違うじゃねえかよ。」

改めて良太郎のイメージ力の悪さに少し凹んだモモタロス。

デントライナーでもウラタロスやキンタロス、リュウタロスなどがうらやましそうに相手を見ていた。

「うわ～いいなあ～、かつこいいな～」

僕もああいうのが良かつたなあ～。

良太郎つてばセンスな～い。

ぶう～～とぶう垂れるリュウタロスに、一番ショックなのはウラタ

ロスである。

あんなにかわいい青色の甲冑を纏つた騎士。

ああいうのが本当は好みなのに：

「アクア、一気に勝負つけるわよ」

『了解へへマスター』

諒夏の言葉にアクアはにっこり笑顔を浮かべる。（表面上は変わらない）

モモタロスは状況があんまりにも突拍子過ぎて考えるのに疲れたのか、一気に剣を振り回し相手を叩き伏せていく。

「アクアボール」

水の螺旋を描き、それを相手に向けて放つ。

それは渦上に描かれて相手の動きを鈍らせる。

「今よ、モモタロス」

「おうよ！俺の必殺技パート2！」

きめポーズを決めて剣を振り下ろす。

爆発音と共に聞こえてくるはずの音はアクアの水流でかき消された。

アクアが去った後、諒夏の手には一枚のカード。

それは見まじうばずのないさつきのイメージが映し出されていた。

「ね、これがイマジンを封印する技法。うちの家系だけが出来る事。

」
そういう微笑んだ諒夏。

呆気に撮られるハナと良太郎。

事情を聞くためにデジンライナーに戻った3人。
そこにいたのは諒夏が探しっていた人物。

「姉さん！！」

双子であるため見分けがつかないがどうやら氣を失っているようだ。
「ちょっと、誰よ、姉さんここに連れてきたのー！」
『僕だけど？』

リュウタロスが悪びれもせずにそういう。

「あなた、人攫いのイマジンなの？封じちゃうわよ？」
『ふう〜〜ん。僕、強いよ、いいの？』

答えは聞かないけど。

一触即発の二人だが、諒夏の方が指を一つ鳴らすとリュウタロスの動きが止まる。

「時空を操る能力があるのはイマジンだけじゃないのよ。そこで反省してください」

良太郎にも乗り移れないから残念でした。

そういうと諒夏は姉の脈を計つたりしてようやく安堵の表情を浮かべる。

「で、あなたは一体？」

「私にも良くわからないけど小さい頃両親をなくして、姉と一人で今まで生きてきたの。」

そのときにね、よく分からんだけど、帽子をかぶつた男の人気が突然現れて、こういったの。

『君達には大事な使命があるんだよ。これを君たちにあげよう』

つてこのパスをくれたの。

それはデンライナーと同じバスケース。

『で、電王が現れたときには君たち電妃がサポートしてあげなくちやいけないんだから』

がんばつてくれ。

つて言われたわ。

「その人の名前とかは？」

ハナに聞かれるがなにぶん小さい頃の話だ、覚えているはずがない。

「あのアクアって口、いる？」

「あなた…誰？」

「ウラタロス。」

「イマジンね。良太郎に憑いてるの？」

「…まあね」

それより、さつきの子、出してよ。

ウラタロスの言葉に小さくアクア、と呼びかけられ、身体から飛び出てきた青い鎧を纏つた騎士。

背中には青い羽を纏つている。

「つていうか諒夏、私のこの羽なんとかならない？」
うつと惜しい。

「飛空タイプだから仕方ないでしょ？」
アクアというのは女性のイマジンらしい。

契約つていうのは面倒で、諒夏と一緒にいるのが楽しいんだって。
「で、ウラタロス？ だっけ…私に何か用？」

「……水の力使えるんだろ？」

どうして先輩のサポートに回つたの?
僕でよかつたんじやない?

「あのね、水と水で戦つたんじゃダメでしょ？」
相対性理論つて知ってる?

「馬鹿にしないでくれる？」

ウラタロスはイラッときた模様。

「炎と水は相性は最悪だけど両方とも使い方次第ではサポートできる。

今日みたいに動きを封じたイマジンごと淨化させられるしね
でも私の好みは氷付けが好きなんだけな～。

「ね～、カキ氷ある？」

ナオミにそう問うアクアにナオミはこつこり笑顔で頷く。

「じゃ、ブルーハワイ一つお願ひしま～～す」

諒夏は?

「…カフェオレ」

ストレートで。

姉の様子が心配なのか諒夏はそっけない。

「つてことはこの上にもイマジンが憑いてるってこと?」

「まあね～」

ハナの言葉にアクアが楽しそうに答える。

「こいつのイマジンは発動しねえぞ？」

現にリュウタロスが攫つてきたときに何も起きなかつた。

「私たちはね、そこの彼みみたいに最近憑いたわけじゃないもの。」

ントロールできるのよ

なんなら出そうか？

アクアが小さく呼び声を上げて微笑む。

「ねえ、スズ、出てきた方がいいと想つよ？」

”ええ～～、だつて寝てるよ～～？”

勝手に出てきたらまた怒られるもん。やだあ。

声が聞こえる。

「諒夏～～、出てきていい？」

スズの事知りたいってさ。

「……姉貴が無事ならいいわ、スズ姉貴護るの手伝つて

”つよいっしょつと。”

ふわっと浮かんだイマジンに一同は驚きを隠せない。

漆黒の鎧を纏い、紫色の羽を背に背負つ騎士。

「ふう～～やあ～～と出てこれた」

あ～～、アクア、久しづり～～。

感じはリュウタロスに似ているが外見から想像するに遙に大人である。

「あ、カキ氷お待ちぢう様～～

「どうも～～」

「うわあ～い～～

うれしそうにスプーンですくって食べ始めるアクア。

それを観たスズもその前に腰掛け・・・

「僕ね～、ブレンドコーヒーの頂戴

「はあ～い」

ナオミはうれしそうに作り始める。

「ふう。スズ、一応姉貴に膝枕してあげて
あそこ置いとくと危ないから。

「了解りょうかい～～」

米俵のように抱きあげるのかと思ひきや、お姫様抱っこのままテン
ライナーのいすに座る。

「つていうかつひりの電車ぢうしたの?」

「走つてゐるでしょ? 時の列車なんだし」

スズの言葉にアクアが冷静に答える。
どうやらカキ氷は口に合つたらしい。

「んと、で話戻すけど、電妃つてこののは?」

良太郎が諒夏の向かい側に座り、問う。

「アクア達に聴いてよ。つちらだつて知らないわよ」

「ンウ～～んふおむんふむんふむうんむ…」

「アクアあ～、口に物入れてしゃべらない方がいいよ

一応女の子なんだし…

スズがそういうと一生懸命口にある氷を飲み込んで口を開く。

「電妃つてのは電王の妃で、時空の守護者の一人。まあ、詳細は分かつてないけど、そういうわれてる。」

「デンライナーの主が電王。」

で、電妃は「あれ？なんだつけ」。

アクアが首をかしげて考え出す。

「クロスライナーだよ」

いいかげん覚えなよ〜。

コーヒーが運ばれてきたスズはそれを飲みながらもアクアの言葉に言葉を足していく。

どうやらこちらの方では双子といえども違う人格のイマジンが憑いているらしい。

しかも話を聞くとどうやらトクイテンらしい。

スズとアクアが一人に憑いたのはどうやら幼い頃…推定で4～5歳くらいのとき。

「表に出られないからさ、でも結構鏡とかでも話できたし、時の列車で育ったようなもんだモンね」

「あ〜〜、でもデンライナーがあるなら要らないかな？」

クロスライナー。

アクアは力キ氷を食べ終え、うれしそうに笑っている。

スズといわれたイマジンも「コーヒーを飲み終えて眠っている紫闇の髪を梳ぐ。

「とりあえず今日は助けてくれてありがとう」

野上良太郎君。

諒夏は手を差し出した。

「ご馳走様でしたとアクアも諒夏の横でナオミたちにお礼を言つてゐる。

「いひらり」や、あんまり助けにならなかつたけど…」

「めんね。

そういうて申し訳なさをうにしている良太郎。

「つうん、全然いいよ。ありがとね。」

もしよかつたら友達になつてくれる?

諒夏の申し出に良太郎は、「ぼくで良かつたら」と頷いた。

「じゃ、私のメアド携帯に送るね」

赤外線送信で互いのメアドを交換する。

「暇なときにもメールして。」

困つたときは助けに行くから。

「…あはは。」

苦笑いを浮かべる良太郎。

ホントはそれ、男の台詞だよなー。とモモタロス。

「先輩…言わない方がいいよ、それ」

良太郎の運の悪さは天下一品だから。

「だな…」

わかってるじゃねえか、亀甲。

自分たちの憑いたトクイテンである良太郎のセンスのなさは知つていたが…

あんなにも違うなんておかしいじゃないか…

と良太郎のセンスのなさを改めて思い知られるイメージソラであつた。

一方、時の列車、『テンライナー』から降りた三人（一人はイマジン）
「クロスライナー」の停車時間まで時間あるよ?」「
どーする?

腕に紫闇を抱きながらスズがアクアに合図を促す。

「諒夏はどうしたい?」

「時の運行が乱れてるみたいね」

「…へえ」

どーしてそう想う?

突然真剣な顔つきでそう告げる諒夏にスズは眉を潜める。
「だつて、『テンライナー』って列車から降りたときの感覚がなんかひ
つかかるの。」

時間の狭間での空間のゆがみ…

うまく説明できないうけど、そういうのを感じたのだとこう。

「時の運行が正常じゃないってことか

「かもしれない。姉さんが起きたら少し聞いてみてくれる?」

スズ。

「わかつてる。紫闇の方がそういうのは得意だもんね」「
僕は専門外だからわかんないけど

「自分が付いてる契約者の癖に…」

わかんないわけ?

アクアは呆れてるつていうか喧嘩を吹っかけてる感じがする。

「そういうアクアだつてわかんないだろ?」「
人のこといえないじゃんか。

そう、時の運行は決して乱してはいけないもの。

でも小さな乱れでもそれがたくさんあれば乱れる事はある。
それを直すのが私達の役目…

「ねえ、アクア、スズ…」

「「ん?」」

二人がリンクして言葉を呴く。

「電妃の役目つて何だらうね?」

サポートつて言つても色々あるでしょ?

二人には詳しくは教えられてない。

ただ、電王のサポートをしようと力をつけるつてことだけ。
封印の力もその一部にしか過ぎない。

「…僕に聞かれてもわかんないよ。」

言つただろ? 僕達イマジンはそういうとこに来たわけじゃないし、

僕らが君達の契約者になつたのだつて本当に偶然なんだ。

「それにね、わかるのはたぶん、時空海のどつかにいる神だけよ
私達も神つてのに逢つた事はないんだけど…

「それじゃ、その人を探せばすべてのピースが埋まるの?」

分からぬことも分かるの?

「ねえ、諒夏…世の中にはわ、知っちゃいけないことつてあると思うんだよ」

知らなくていいことのほうが多いって私は思つんだけど、違う?
アクアが諭すようにそう呴く。

次の瞬間、時のハザマから見慣れた列車が到着の音をかき鳴らし、
降りてきた。

「さあ、おしゃべりは後々…戻ろう、一人とも。」

スズに促され、クロスライナーに戻った私達。
これから先…何が待ち受けているんだろう?

新たなるもの……その名は電妃（後書き）

ん～～難しい問題だね。

でもま、今後どうなるかが見ものかな？

「スズ視点」（前書き）

紫闇についてるイマジン、スズ。
彼が一人に対して想つてることをつづつてます

（スズ観点）

君が泣いてる気がしたんだ…

だから、僕は君の傍にいる。

ずっと…ずっと…

その為に契約した。

君が望むままに傍にいるために…
誰のためでもなく、自分自身のための契約。

”君を一人にしない。”

生きるときも、死ぬときも君と俺は一心同体だ。

そう、あのときから…

「スウ～ズ？」

「……なあに？」

アクア…

自分の目の前でカキ氷を頬張るアクアにしれっとした顔を向けた僕。

こいつはアクア。

俺と同種族のイメージングって呼ばれてるやつ。

俺たちイメージングってやつは時の狭間から飛び出して2007年に降り立つた。

もちろん、過去を変えて未来を自分たちの好きなようにするために

でも俺たちが向かったのはそりじゃなかつた
その時代じゃ…

途中、会つたアクアと意氣投合したわけでもないんだけど、波長が合つていうのかな？

何か知らないけど、こいつとは同じ某体についてる。
同じつていつたら変か…親族なんだもんな一応。

俺たちが逢つたのは過去も過去…

今、憑いてる子達が4～5歳くらいのとや。

今でも覚えてる。
耳に残る強い声…

あの子達は覚えてない。

そつ…でも覚えてない方が幸せなんだ…やつと。

「ビーしたの？スズ？」

「ヒー冷めるよ？」

「……わかるよ。」

ちよつと考え方してただけや。

「コーヒーはアクアの言つたとおり少し冷めていた。
でも飲めないって訳じゃないから大丈夫。

「なあ、アクア…」

「なあに？」

「あの口達を護るんだよな…俺ら」

「…なあに？今…」

へんなの。

そういうつてサクサクと音を立てながら力キ氷を頬張つていく。
どうしてそんなに食べて平氣なんだうつな？」「…

あの「達が特異点だと知つたのはもう数十年前。
自分たちを従える事の出来る存在…特異点。
こいつらにつかまりたくないつて俺たちイマジンと呼ばれる存
在は想つてる。
だって、つかまつたら最後、契約を完了するまで離れられないんだ
から。

そして今の姿、つまり紫色の羽を生やした騎士の格好はその特異
点である彼女が描いたモノ。

同じ特異点でもセンスの欠片もないやつらにつけられた奴を知つて
から、
まあ、こいつらでは良かつたと想つてゐよ、僕は。

あの子達を護る事に異存はないけど、でも、あの子達の親の話をし
たらきっと恨まれるだろ？な
つていうか、その前にどうにかされそだ…

僕の憑いている子は名前は紫闇。

アクアの憑いている子の姉で、たつた一人の身内。

ちなみにアクアの憑いている子は諒夏つて口。
両方とも名前で分かるように女の子。

特異点で電王と呼ばれる者の妃、電妃つて使命にある。
まあ、サポート役だから別に害はないけど…

僕たちが乗つてゐるこの列車はクロスライナー。
デンライナーが電王の列車で、クロスライナーは電妃の列車。
何で分かれてるのかつて？

僕に聞かれても困るね。決めたのは誰だか知らないんだから…

「アクア…」

「なあに？」

「あの口達にいつか本当のこと話さなきゃいけないんだよね

」
「……………そうね」「

小さくそう呟いたアクア。

そう、大きな隠し事してるんだよ、僕ら。
でも逸れを言つわけにはいかないんだ。

過去が変わつても未来が変わつてもそんなの関係ないけど…

「デモ…」

君たちが大事だから…

だから…

教えてあげられないんだ。

「アクア…」「スズ…」

二人の声が聞こえる。

「アクア、お呼びだ
「待つてました〜」

うれしそうに時空を越えて彼女たちのもとへ駆けつける。
きっと待ちくたびれてるに違いない。

「今行くよ
待つて…紫闇。

「お待たせ、諒夏」

「遅い！」

「来たよ、紫闇」

「遅いわよ、スズ」

そういうわれても早く来たつもりなんだだけね。これでも。

「あんな雑魚…すぐ倒すよ」

「アクア…焦らない」

「スズは冷静になりすぎ」

もう少しファイティングは熱くならなくつけやつまんないでしょ？

僕は苦笑いを浮かべた。

僕とアクアは正反対。

火と水、闇と光…そういう感じ。

「さあ、電妃…」

お手をどうぞ。

紫闇の手をとり、僕が主導権を握る。

「マイクアップ
変身」

紫色のボディで羽の生えた墮天使の出来上がり。

アクアの方も水色の羽の生えた墮天使。

アクアは錫上。僕はクナイ。

アクアは飛行タイプ。

だけど僕はすばやさでは負けるつもりない。

「さつさと出すよ、アクア」

「もひもひん」

そう、さつさと切り上げて今日は眠ろう。
嫌な事思い出しちゃったし…

「「封印…」「

一つの声が聞こえたとき、僕は…紫闇から離れ、クロスライナーの中に戻った。

いつか、僕とアクアもああやつて封印それでいくのかな？

「ねえ、アクア…」

「ん？」

いつか僕達もああやつて封印されるのかな？

そう聽けばアクアは首をかしげて「わかんない」と言つた。

「諒夏と紫闇がそれを望むとは現時点では考えられないし…」

「ブルーハワイーつ。

「あ、僕、コーヒーちょっとだい

列車の添乗員にさうこうと一いつ返事でのくと出た。

「ふう～～、今日は疲れた～～」

「なよつてゐるのにね～～」

意外にしぶとかつたわね～。

紫闇と諒夏が戻ってきたみたいだ。

「おつかえり～～」

紫闇、諒夏

アクアがにっこり微笑んで手を振つてる。

「アクアはそれ、好きね～」

運ばれてきたかき氷に呆れ氣味の紫闇。

毎度毎度食べてるんだから、確かに見慣れた光景だろうナビ……

「これが好きなのよ、しようがないでしょ?
ならズズだつてそうじやない。」

「…僕?」

僕はコーヒーが好きただけだよ。

「一緒にやん。」

「クスクス…」

僕とアクアの二こづり取りに最後は一人が笑うんだ。

そう、こづり時間が僕達には楽しいんだ。

昔から容姿は変わつても中身はある程度変わつても、こづりやって変わらないでいてくれる……

それが…今はうれしい。

「で、今日はどの過去へ？」

「2001年だね、このイマジンと関係してた契約者が契約したのは

は

「じゃ、いきますか

「だね。」

そういうて飛び出していく一人を僕達はここから見守っている。

何かあつたら駆けつけるから…

だから、僕達を呼んでね。

ね、二人とも…

いつか君たちが僕達を必要としなくなる…その日まで…

僕達は君たちを…

僕達自身の意思で…

護るか
..

「スズ視点」（後書き）

スズと「アクア」というオリジナルイメージがいりますけど、二人はどうやって紫闇と諒夏に出会ったのか…なぜ一人を護る結果になつたのかを書きたいなと想つて書きました。オリジナル要素多くてごめんなさい。

歪み……そして電妃（前書き）

時空の中にいるHの指示でやってきた電妃。
歪み……そして大人の桜井悠斗の目的とは？

歪み…そして電妃

『電妃？ 聽いた事ないな』

『「テネブが知らないって言つんだから俺も知るはずねえだろ?』
悠斗に聽いてみたけど、やつぱり知らないって。

当然だよね、ハナさんだって知らないって言つてたんだから。

『そいつが電王の妃つていうんだつたら聞いてみたらいんじゃない?』

何か知つてるかもしねいでしょ？ 彼だつたら…
ハナさんに言われて、悠斗にゼロライナーまで聴きに来たんだけど…
ほら、悠斗なら何か知つてるんじゃないかなって。

あの一件以来、諒夏さんと紫闇さんはミルクティーフバーには来なくて、心配はしてたんだけど、（メールも来なかつたし…）でも最近メールが来たんだ。

内容がちょっとアレだつたけど…

紫闇さんは最初、険悪なムードだつたんだ。
まあ、非は僕達（特にリュウタロス）に合つたから仕方ないといえ
ば仕方ないんだけどさ。
なんとか僕達は友達になつた。

新しい道が発見されて、その調査もかねてこつして尋ねてきたんだ
けど…

「やつ…か…」

『お役に立てず』、『めんね、良太郎君』
デネブが申し訳なさそうに俯いた。

「つうん、でね、悠斗、その人達がね、悠斗に逢いたいって言つん
だけど…」

どうかな？

逢つてもらえないかな？

『何で俺が逢わなくちゃいけないんだ？』

それに、俺には関係ない話だろ？

「いや、それが、どうしても悠斗に話たいことがあるって」
諒夏さんが。

『ふう〜ん、どうしてもってんなら逢つてやらない事もない』

『ほんと』、じゃ、早速メールしてみるよ

『…お前…メールとかしてんの？』

メル友とか言つやつか？

『そういう感じ…かな。』

『電妃か…何だか、いやそりゃ女の中つてどうこうのが好きだと想つ?』

悠斗。

『俺に聞くな…』
デネブ。

悠斗の機嫌は最降下。

——女なんてあいつだけで十分だ。

カードを無くした悠斗はもう変身できない。

なのに、どうして俺はここに存在してるんだろう…

悠斗はかけながら見守つていくことに決めたのに、自身の決意が揺らぎやうになるのを必死に耐えていた。

数時間後、ゼロノス、デンライナーの近くに一台の列車が到着。クロスライナーである。

外見はパールホワイトで、細身、そして、前方がデンライナーと同じようなつくりになつている。

そこのドアが開き、出てきたのは一匹のイマジン。

「アクアさん。」

『「んにちわ、良太郎さん』

につこり笑顔のアクアにテネブが戸惑つ。

「良太郎くん、あの子は誰ですか？」

「あ、えっと、諒夏さんにのついてるイマジンで、アクアさんだよ」テネブ。

「始めてまして、諒夏についてるイマジンのアクアです。」

「あ、これは」「寧にどうも。テネブです」

互いに頭を下げる挨拶しあう。

そんな姿に思わず悠斗が笑みを浮かべる。

良太郎も釣られて笑う。

「で、肝心の諒夏さんは？」

「あ、諒夏ね、待つてて、もうすぐ来るから。」

列車内に入つて「早く、早く」と急かしているのが分かる。

何かやつてゐるよつて、「待つて～」といつ声が聞こえる。

「そういえば、紫闇さんは？」

「ふと別件でスズと出かけてるよ」

「別件？」

「ん。」

『ヒヒと笑顔で言われるのでそれに攣られて笑みを浮かべる良太郎。

ドタドタドタという音がして、出てきた諒夏は汗を流しながら荒く息をついた。

「『めつ、りょうたる…待たして』

「だつ大丈夫？」

額の汗が凄かつたため、ハンカチを差し出す良太郎。

「あ、ありがと。」

素直に受け取り、アクアはジュースを差し出す。

「サンキュー、アクア」

「どういたしまして。」

『で、お前が電妃か？』

悠斗の静かな声が響く。

『電妃の一人ですけどね、正確には』

苦笑いを浮かべる中、アクアは良太郎をクロスライナーに案内するといつて乗せた。

それと同時に諒夏がクロスライナーを降りる。ドアが閉まり、時空の間と呼ばれる砂の地帯には悠斗、そしてテネブと諒夏だけが残った。

『私は諒夏、電妃で時を知るもの』

「時を…知る？」

テネブがそう呟くと諒夏はわざままでの笑顔とは違つてまじめな表情になる。

『ミルクティーパーにいる野上愛理、そしてその婚約者の桜井悠斗。

そういわれ、悠斗の表情が厳しくなる。

『そして、電王として選ばれた野上良太郎。すべてのピースが埋まり、そして、時空が歪み始めた』

諒夏は淡々と語る。

『ゆがみの原因は桜井悠斗自身だと。

「じゃあ、俺が歪みだと？」

「そんな！ 絶対歪みなんて…」

デネブもそれには猛反発。

『私が言つてるのは野上良太郎の知つている桜井さんの方。』

「……」

『でも、あなたもそろそろ決断のときが来てる』

彼は未来を変えようとしている。

諒夏の言葉に悠斗は眉を寄せた。

『だから、私はその手助けをするために今日良太郎に連れてきてもらつたの』

「ちょっと待て！ 決断とか手助けとか、一体何のことだ！？」

『わかつてのはずだよ、桜井さんが来たでしょ？』

ゼロノスになるためのカードを持つて。

「――――――」

なぜ知ってるんだ…？

デネブが驚きに固まる。

『あなたも桜井さんでしょ？』

私たち電妃は補助するのが役目…

そう言つて一枚のカードを取り出す。

それはまぎれもなくゼロノスのカードだった。

『聴いた事あるでしょ？ 時空海の中にいる王の話。』

「…ああ

「デネブ…？」

『王がおっしゃったの。新しい路線が出来たとき、これを彼に渡しながらいって』

『まさか…これがあの路線の？』

路線にいけるカードなのか？

悠斗の言葉に諒夏は首を横に振り、

『違うよ。でもあなたのカード一枚消費しなくてもゼロノスになる。』

忘れたくない、忘れられたくないっていう気持ちは分かるから…

『だから、一枚だけ、特別なカードなの』

たつた一枚だけど…

申し訳なさそうな諒夏にデネブは深く頭を下げた。

『ありがとう…ありがとう…』

涙を流しながらデネブはそう咳き続けた。

『一人だなんて想わないで…私たちもいる。良太郎達だっているんだから』

何かあつたら頼つて来て。

『諒夏…』

ドアが開き、出てきたアクアはうれしそうにぴょんぴょん跳ねて諒夏の傍に寄つた。

その後ろでドアにもたれかかるように座り込む良太郎。

どうやらアクアの遊び相手にされたようだ。

『アクア。駄目でしょ、良太郎で遊んだら』

『案内しただけだよ…vv』

ね〜〜。トリュウタロス並の笑顔を向けて良太郎に同意を求める。

『…だつ大丈夫だから。』

『そんなにつらそうな顔したつてわかるつて。』

『ごめんね、良太郎。』

「でもゼロノスともテンライナーとも違う歸りなんだね。」

驚いたやつた。

『あはは…』

「おい、良太郎、イマジンだ。

モモタロスの声が良太郎に聞こえた。

「え？ イマジン？」

『ああ、もうすぐ出発すんぞ』

急げ。

「わかったよ。」

そういうと良太郎は立ち上がった。

「じゃあ、またね、諒夏さん」

『またね～～～vvv』

手を振る諒夏。

乗車するとすぐに動き出すテンライナー。

『じゃあ私たちも行くね。』

今日はありがと、桜井君。

手を差し出す。

「……」

スタスタとそのままゼロライナーに向かつて歩き出す悠斗。

『素直じゃないな～～』

「あの、ありがとうございました」

デネブはちゃんとお礼を言つて頭を下げた。

『デネブさん、もし何かあつたら私を呼んで。これ電話番号ね』

紙を一枚渡すと先を歩いていた悠斗に呼ばれ、そそくせと立ち去るデネブ。

残されたアクアと諒夏はゼロライナーの発車を見送った。

『お人よしだよね～諒夏つて』

『かな～？』

『まあね、あ、お客様来てるよ～～』

早く戻るつ。

アクアに促され、クロスライナーに戻る諒夏。

『特別室に要るよ』

『ここ、良太郎には？』

『見せてない』

『そ、ありがと。紫闇から連絡来たら教えて』

『りょおか～～い』

アクアと食堂車で別れ、諒夏は一つの扉をノックする。
そこのプレートには『特別室』と書かれていた。

「どうぞ」

『お邪魔します』

そのドアをあけた瞬間見えたのは…帽子を深く被った悠斗。

悠斗に笑いかける諒夏。

そのドアが静かに閉まる。

それと同時にクロスライナーが出発。
時空を越えた。

『やつぱり貴方でしたか…』

「……彼は受け取るかな…これを」

そこにいたのは桜井悠斗。

良太郎が探し続けている大人の彼。

そして、辛き運命を背負つた一人の青年。

時空海の王が言つていた、ゆがみを作つたもの。

そして、それは過去、現在未来を左右する特別な路線。

『アレの正体がつかめ次第、ご連絡差し上げますわ』
確実に貴方のやろうとしてる事は成就し始めています。

「……そうですか」

『良太郎君の記憶は消えません』

そして、あなたの婚約者の愛理さんの事も。

その為に私たち電妃はあるのですから…

「…良太郎君が危ない… イマジンは徐々に強くなつてきてる。」「これを…

悠斗が受け取らなかつたカードケース。

それを握り締め、大人の悠斗は苦い顔をした。

『急ぎましよう、今、良太郎君が向かつた場所にこちらも向かつて
ます』

ゼロノスにも連絡を入れさせますから…

「すまない」

特別室のドアを開けて出て行こうとした諒夏に大人の桜井がただ一
言告げた。

『お気になさらずに…』

そういうてドアを閉めた諒夏。

廊下でアクアが電話をしていて、そして諒夏を見つけるとすぐに電
話を切つた。

「諒夏～、電話完了してゐるよ」

「ありがと、アクア」

「紫闇とスズも来るつて」

どーする?

「…姉さんには引き続きあの路線のこと、そして確実に変化してきてるのの調査を続けてもらつて」

こつちは今、やらなきゃいけないことがあるもの。

「りょおか～い▽▽▽」

ピッポツパ：

「あ、スズ～？」

アクアが電話している間に車両の窓から外を見つめる諒夏。

——歪みを正す事はしない。

だつて、それは確實にいい方向にいくのだから…

私たちのすべき事は…電王である良太郎の笑顔の為に動く事。
存在すべてを掛けて、その方の願いをかなえること…

それが…電妃…

——そして、歪みの原因は私達にもあるのだから…

諒夏は一人、走っていく電車の車窓から外を見ていた。

そして、良太郎が戦闘している頃、到着したゼロノスの前に大人の桜井を降ろし、車窓から見守る。

カードを渡し終えたのか、桜井はクロスライナーに戻ってきた。

「では、次の駅までお願ひするよ」

『了解です。』

諒夏がそういうと大人の桜井は特別室と書かれた部屋へと入つていった。

歪み…そして電妃（後書き）

助けるんだけど、それは良太郎に笑顔でいて欲しいから…
だから存在なんて…関係ないんだよ。
ただ、笑っていて欲しいから

確実に変わる未来（前書き）

テレビシリーズ（2007／10／14）の放送直後に書いてしまいました。
どうなるんでしょうか？

確実に変わる未来

「やつぱり…なんらかの力が働いてるとしか思えない」

紫闇はそう呟いた。

近くにいたスズも辺りを巡回していたのか、空から紫闇の元へ舞い降りる。

『みたいだね、ここ、捻じ曲がってる。』

しかも、無理やりね。

新たに出来た路線。

その先に何が待ち受けているのかを調査していた紫闇達だったが、路線の入り口までスズが確認しに行き、紫闇は一人、線路のしたにある窪みから

時間の流れを読み取っていたのである。
そして、行き着いた結論は…

「もう時間がないみたいね」

『…だね』

それに、なんか嫌な気配もあるし…

「一度クロスライナーに戻る」

諒夏に連絡とつて。

『了解。』

「姉さん！！良太郎に憑いてるリュウタが暴走してる」
クロスライナーに入ってきたと同時に諒夏がマシンガンのようにしてやべりだした。

どうやら時空の中に入ってきたらしい。

そしてクロスライナーもそこに入らうとした瞬間、飛び出してきた列車に驚き、後を追う事にしたという。

「…あの男の所為？」

「みたいだよ。」

『あの男って誰？』

アクアがスズに呟く。

『さあ…』

でも、目の前走ってるのデンライナーじゃない？

「うつそお～～」

爆走しているデンライナー。

「だって…あれってオーナーがちゃんと動かしてる…はず」
これ以上走り始めたら暴走して壊れちゃうよ…！

「諒夏…！」

「了解…！」

「…変身…！」

ノーマルモードではなく、スズ達が憑いた状態の一人。

「アクア、王に許可を…」

『りょおか～～い』

「スズ、あのデンライナーを止めるわよ」

『了解。』

適当な返事で機関室へと向かうズ。

電車の中から王と時空王と電話をするアクリア。

「時の流れを壊すもの……カイ……」

それが奴の名前・

『ひがしまで』

— わかりました。では、キンケ…」

タリミナ川にはこち

これからも。

中年の男の声でそう呴かれ、アクアは頭を下げつつ口キを置いた。

「起動開始。」

姉さん

了解。良太郎の方は諒夏お願ひ。

「樂府新編」卷之二

「だよ
ね」

アクア、いつくよ～。

『おー！』

アクアはうれしそうにその場から姿を消した。

良太郎に着いたリュウタロスの前に現れたゼロノス。
それと戦う黄色イマジン。

そして、カイと呼ばれる人物。

「「！？」」

二人の前に空から現れる蒼い光。

『こんなのに苦戦してんじゃまだまだじやない？』
うおらつ！！

アクアのキックが炸裂。

宙を裂き、舞うようなステップでイマジンにダメージを与えていく。
「てめえ…」

悠斗の言葉にアクアはにっこりと笑う。

『とりあえずこっち先片付けるよ～～』

「上等！？」

悠斗とアクアの連携プレイでイマジンは光の渦へと化す。

「おや、あなたが電妃…ですか？」

カイと想われる青年がアクアを見て口元を上げる。

『そおだけど？あんた、誰？』

諒夏が言ってたけど、あんた敵？

そしてその隣にいたリュウタロスに視線をやった。

『こおいうの、ズズの役目なんだけどさ、あんた…最低』

あんたの好きな電車、こんなにして、そして愛理さんも傷つけた。
良太郎にもマイナス。

あんた、最低。

アクアの冷たい声がリュウタロスに告げられる。

リュウタロスは黙つたまま…

それが自分のしでかしたことだし、やつたらいけないことだった。わかつてた。

でも…

——ボクだつて…お姉ちゃんに甘えたかつたのに…

悠斗と話してゐるときの愛理さんの表情に嫉妬した。

悠斗にしかあんな笑顔見せない。

弟の良太郎にすら…

それが悲しかつた…

「そつか、ボク…悲しかつたんだ」

今じろり気づいた。

座り込むリュウタロスにカイは足を振り上げた。

『つていうか、あんた、邪魔なんだよね！』

アクアが諒夏から離れ、アクアとして整形された。そして、カイの足を掴むとそのまま放り投げた。

『あんた、最低。イマジンのボスにでもなつたつもり?』

それに、今日はあんたのおかげで最低最悪の日になつちやつたんだけど、

この責任、どう取つてくれるの?

冷たい視線でカイと呼ばれた青年を見やるアクア。

電妃の特性…ですか。

だが、彼は冷静にそう呟く。

『うちらとこと構えるつもりなら…容赦しないよ。』

それに、あなたの目的、潰すつて今ならいえる。

「アクア…」

リュウタロスの言葉にアクアは後ろ手を差し出す。

『あんた、負けるつもり?』

答えは?

『聞いてないけどね』

『よおつと。』

足で地面をけり、その反動で起き上がる。

『今回だけはありがと』

『ほいっ。』

握らせたのはパスケース。

『これえ~』

『うちのだけど、貸したあげる』

一度しか使えないから気をつけてね。

『ありがと』

変身。

ガンフォームへと変身したリュウタロス。

その後ろから見守るゼロノスと諒夏。

『おい、あれはなんなんだ！！』

説明する。

『詳しい事は分からないんだけど、たぶん、ゼロノスに入ってるパ
スは时空を永遠にループしてさまよう

恐ろしいカードだと想うの』

推測でしかないんだけど…

『んなの、どーすんだよ！！』

「大丈夫、今もう一人の電妃がうちらの列車で後を追ってる。」

絶対止めて見せるから。

安心して。

悠斗は信じられないといつ顔をして変身モードを解いた。

「あ、まだ変身してて、たぶんもう一体…」

来ると想つか。

『それも電妃の特性ってやつか?』

「しいて言うならそうかもね。詳しい事なんて誰にも分からない。」

ね、少年の桜井悠斗君

『…何知ってやがる?』

「しいて言つなら…貴方の知らないことまで…かな」

含み笑いをする諒夏を見つめるゼロノス。

イキキキ…

地面から声が聞こえる。

さつきのイマジンのイメージが暴走しているようだ。

『デネブ…』

悠斗が呟く。

でもゼロライナーがない以上攻撃は下からとなるから、苦戦も必須だ。

君にこいつは止められないでしょ?

ゼロノス…いや、桜井悠斗…

うれしそうにカイと呼ばれた青年は笑う。

だが、それは諒夏によつて遮られる事になる。

「つっこよ、ボケ」

諒夏は一つそりとしてポケットからカードを出した。

「在るべき場所に戻りなさい、馬鹿イマジン」

カードを地面に置くとそれは砂となり、辺り一面を埋め尽くす。

「もとあるべき場所、もとある時代、我ら電妃の名において、かの者を封じん」

戻れ、わが元に。」

「今よ、ゼロノス」

『なんだかよくわかんないけど…』

行くぞ、デネブ。

『了解だ』

フルチャージ…

弓型になつたのを怪物めがけて発車。

直撃した』の先にカードが出現。

カードが現れたと思えば、先ほどの声が小さくなり、何も書かれていないカードにさつきのイメージが映し出されていた。

…それが電妃の力…ですか

カイと呼ばれた青年はリュウタロスをうまく撒き、そこにたたずんでいた。

「そりゃ、あんたの策略なんてキングはお見通しつてわけ」
時空の管理者である者の知略を甘く見ないでよね。

あの男の指示…ですか

「未来は変わるもの。ちょっとした変化でも変わってしまう。だから人は面白い」

諒夏の言葉にカイと呼ばれた青年は田を細める。

ボクの計画潰してくれるんだって？笑わせないでくれる？
ねぇ、ボク怒ってるでしょ？

そつこつて田を細めたまま低い声でそり返す。

『なあ、元気ですか？』
『元気です』
諒夏馬鹿になると許さないよ。

アクアも珍しくやる気満々のようだ。

『それでいい、時空海の王に掛かったら、あんたら死ぬよ？
あの人のこと知らないわけじゃないでしょ？』

時空王…そつこつと聞いてカイと呼ばれた青年の田つきが微妙に変わる。

あの方が…そりですか。

今日は部が悪い…出直しましょ。

失礼。

そういうと淡い光に包まれて影もなくなつていった。

「アクア、クロスライナーとモモタロスたちが心配だわ、戻りまし
ょう。」

諒夏の言葉にアクアは首をかしげた。

『ねえ、あんた、リュウタロスだつけ？』

『……そおだけど？』

変身をといてアクアにバスケースを返した。

『良太郎から出たら形維持できないの？』

不思議そうなアクア。

『わからんないけど、大丈夫だと想う』

『んじや、後始末するんだから付き合つて。』

あんたがやつたの手伝つてあげるんだから、早く。

急げ。

急かされて良太郎から離れるリュウタ。

それとは反対に眠りこける良太郎をなんとか悠斗が抱きとめた。

『おい、野上…』

「……大丈夫、気を失つてるだけだわ」

脈を診て、ホッと一息ついた諒夏。

『じゃあ諒夏…ステーションでまたね～～』

ほら、行くよ、リュウタロス。

『……』

アクアの翼が広がり、リュウタロスを持ち上げて空へと飛び立った。

『で？俺らはジーすんだよ』

『ここで…』

良太郎を支えながら座り込む悠斗。

「もうすぐ姉が来ます。」

『姉?』

「言つてませんでしたか? 私に姉がいること……? 双子なんですよ」
だから同じ顔ですけど……

『そいつがきて何か状況が変わるのか?』

「変わりますよ。桜井悠斗さん。」

『??』

フルネームで言われ、悠斗は少し怪訝そうな顔をしていた。

「今、姉が何処にいると想いますか?」

『んなの俺が知るわけないだろ?』

「……ゼロライナーとデンライナー……」

それだけ言われ、察したのか悠斗、そして『デネブ』
変身をといた悠斗のカードは消えなかつた。

『カードが……』

『消えてない!……』

「でしきうね……運命^{さだめ}は変わる……」

空を見上げて諒夏が呟く。

『おい、どういうことだ!……?』

『落ち着いて……悠斗……』

『デネブ……お前、野上見てる』

答える!――

諒夏に掴みかかる悠斗。

「運命は変わる。新しい路線がその証拠。大人の桜井悠斗は自らの
意思の強さでそれを変えて見せた」
そしてこれからも運命は変わり続ける。
それを見届けて……桜井悠斗。

『お前…何を知ってる…?』

「これから先は何も…でも新たな道へ入るためのカードを探さなきや…」

貴方の記憶は消させない…これ以上。

諒夏の言葉に悠斗は眉間に皺を寄せた。

『あ〜〜、これって…もしかしてこの間頂いた…?』

デネブの言葉に首を横に振る。

「違うわ。私があげたカードはそれじゃない

『…過去が変わってるって言つのか?』

「ええ、確実に…」

変わる過去…そして、それが未来…現在へと変わる。

何がどう変わるか分からぬ…でも、分かつてゐ事はただ一つ…

電王が、そして私達の運命は今まであった未来とは違うところだけ…

確実に変わる未来（後書き）

新たな敵：カイ。

イメージにどう関わってるのか分からぬ。
不安と期待を胸に、電妃は空を見上げた。

片付けは私たちの役目じゃない（前書き）

謎の青年、カイ。

彼は何を知ってるのか？

その後始末：なんで私がしなきゃいけないの？

片付けは私たちの役目じゃない

つたく、どうしていつもあいつらの始末しなくちゃいけないのよ。
デジライナーを追いかけてクロスライナーを走らす紫闇。

『仕方ないんじゃない？電王も必死にがんばってんだしさ
あっけらかんと言つてくれる…』

「そう想うならズズ、あれ止めてきてよ…」

厄介な事にデジライナーの後ろにはゼロライナーがいて、連結して
る。

たぶん、動いてるのはゼロライナーだ。

『主はゼロライナーか…』

一度発進したらやっかいだもんね。
あれ。

そう、桜井悠斗（大人）にあれを渡したのだって私達だった。

ゼロライナー…一度消えたはずの列車。

過去から未来…現在を行き来するもう一つの異端列車。

すべての始まりと終わりを意味する列車。

王の命令で探し当てて消える前の列車をこっちに引っ張ってきた。
そして、大人の桜井悠斗に貸し与え、そのゆがみを作る手伝いをし
た。

それもすべて自分たちの運命を変えるため…

最初は嫌だった。

どうして私たちがこんな事をしなくてはいけないのかと。
イマジン?どうだつていい…

アクアとスズもイマジンだけど、彼らは小さい頃から知ってるから…

イマジンといわれてもあまり感じない。

だつて家族みたいなものだモノ。

私と諒夏の大切な二人の家族。

「でえ?…どうするの…あれ止めるの」

『とにかく、ゼロライナーに近づかないと駄目だらうね。コントロール室に行つてバイクからキーを抜かないと…』

「方法は?」

『今のところ…見つからない』

走つた列車は急には止められないから…

攻撃して止めるか…

でもそれだと壊れないか?テンライナーとゼロライナー。

無傷つていうのは難しいだらうけど…でも無傷に近い状態じゃない
と…

「キングライナー」

『どうしたの?紫闇』

スズが奇妙な言葉を呟いた紫闇に驚く。

「御用作家」と浮かんだの

王の住まいの場所……そしてデジタルライナーのある部屋……

H... つまつ電H... エル。

キングライナー…聞いた事ない。

「名前は違うかも…でも新たな路線を見てからいつ…今までと違つ
よつた感じがするの」

『とにかく、あの先の崖からどうかへ飛ばれたら厄介だ。一気に止めよう』

「了解。」

変だな……私……
なんかおかしい……
どうしてだろう……
胸騒ぎがする……

今までと違ひ」と

何かが…始まる…予感がする。

『紫闇、一氣に行くよ』

「OK！」

無傷で還せなくてごめんね。

良太郎君。

片付けは私たちの役目じゃない（後書き）

これ以上何も起こらないといいですね。
テレビシリーズをみて書いてます。
雑ですみません。

悲しい未来なんていうなこさまつむもと（前書き）

謎の青年、カイ。

彼と出会ってからアクアはずっと想っていたことをふとしたきつか
けに口に出してしまった。
ずっと一緒にいたのに…
一緒にいたいのに…と。

悲しい未来なんていらないときまつくるもん

許してくれないよね…

諒夏も紫闇もや。

あつと…本当のことをこつたら…

うちらだつてイメージだもん。

許してなんてくれないよ…

でも、嫌われたくない。

諒夏に…

あの子だけには嫌われたくないもん。

『…じしたの?』

『リュウタロスはいいね。良太郎とあんなに仲良しだぞ』
リュウタロスを引っ張つていつたアクアが突然泣き出しあつた顔になつてリュウタロスは心配そうに顔を見つめた。

『そお?仲いいとかじゃないと想うけど?』

つていうかそつちは一人だからいいじゃん。うちは四人もついてる
んだよ?

『良太郎の運のなさも最悪だし、』

ボクなんていつもテンライナーで遊んでるんだよ。
ほとんど戦つてるのはモモだもん。
つまんないよ、ホント。

『でも、あんなにあんたのこと考えてくれてるじゃん
さつき、カイつて人に馬鹿にされてあんたを庇ってくれたじゃない。

アクアは微笑んだ。

リュウタロスは不思議そうな顔をしてアクアの顔を覗き込んだ。

『何いつてんの？あんたの方が心配してくれるだろ？』

『……』

当然でしょ？

ふとした瞬間、アクアの答えに間があった。

リュウタロスはそれに違和感を感じながらもアクアと共にデンライナーの所に

アクア自身が連れてきたリュウタロスとともに時空の中を超えた。
そして、出会ったデンライナーはキングライナーに入り、なんとか急停車していた。

『スズ／＼』

『やあ、アクア。』

『リュウタロス、ほら、戻りなよ』

行くんでしょ？

もう大丈夫だよね？

アクアの言葉にリュウタロスは俯きながら頷いた。

『まつたねえ／＼／＼』

笑顔を浮かべるアクアにリュウタロスはにっこりと笑って手を振つた。

「アクア…諒夏は？」

『うん、ゼロノスと一緒に。』

どうせゼロライナーも戻すから丁度いいかと思つて。

置いてきたへへ

笑顔でそういうアクアに紫闇はただため息をついてキングライナーからゼロノスを引き取る手はずを整えにエントランスへ向かった。

『アクア?』

どうかした?

スズにはなんでもわかつちゃうんだね。

『ねえ、スズ…カイって男がうちりイマジンを自在に操れる能力持つてるんだけどさ』

過去も未来も変わつて…諒夏達が私達のこと知つたらわ…

軽蔑されちゃうかな?

アクアの言葉にならない言葉にスズは黙り込む。

”一人にだけは知られたくないのにな…”

アクアはただ空を仰ぐ。

クロスライナーの窓から見える時空の中。

そして、ステーションと呼ばれた場所の風景。

『特異点…そして、彼女たちの素性か…』

そいつは何処まで知つてゐのかな?

スズの言葉にアクアは首をかしげる。

『少なくとも時空王のことはご存知みたいよ

『…じゃ、ある程度は敵さんもご存知つて事?..』

『リュウタを良太郎に憑かせたのもそいつみたいだし…』

『…ふうん。ある程度のイマジンはあいつの味方つてわけ?..』

『だらうね。』

これ以上…二人に何かをさせたいわけじゃない。
誰かを傷つけたくもない。

でも、これは契約。

私達とあの方たちの契約。

”悲しい未来はもういらない。”

”悲しい過去ももういらない…”

未来が変われば私たちも変わる。

生まれないかも知れない…出会えないかも知れない。

消えるかもしない…

消えないかも…・・・しれない。

でもそれはありえない。

予感がするんだ…

きっとあの新しい路線の先には私たちはいないんだって。

『ねえ、スズ…』

『…今を楽しむ…』

『え?』

『いつもの君ならそういうんじゃない?』

アクア…

スズに言われて苦笑い。

「どうだよね、私らしくないよね? 悩むなんて。

「アクア、スズ、諒夏達迎えに行くわよ。」

アクア、諒夏に伝えて。

機関室から聞こえる紫闇の声に『りよおかーい』と叫ぶ。

『アクア…』

『大丈夫だよ もう考えるのやめたから』

そういうのはスズの役目だもんね。

私はおつきらぐだもんvv

精一杯の笑顔を作つて食堂車へ向かうアクア。

ドアが閉まつて食堂車についた瞬間、座り込む。

”諒夏や紫闇と逢えないなんて未来… いらない…“

ずっと一緒にいたのに… 忘れられるなんて嫌だ。
でも…

それが一人の幸せなら…

それで諒夏と紫闇の笑顔がずっと続くなら…

うちらイマジンなんていないほうがいいんだ。

未来が変わつて… 逢えなくなつても…

全然… 辛く…

涙が頬を伝う。

拭つても拭つても零れ落ちてくる涙に… アクアはただ、座り込んで

その涙を拭っていた。

悲しい未来なんていらないときまつたるもん（後書き）

過去も未来も、運命さえも変えてしまつ自分達の存在。その事に悩まされてるイマジンのもう一人を書いてみました。お氣楽そうに見えても悩んでるんです。アクアだって。でも役割つてあるじゃないですか、良太郎の所も。だから一人の所もきつとあるんだろうな～って。アクアはちなみにメンドくさいからスズ考えてつていつタイプだと想つたんです。

変わり行く運命（前書き）

カイという青年の登場で未来が変わってしまう。
それを知つてか時空王と呼ばれる人物から呼び出しをくう一人。

変わり行く運命

時空の王から呼び出しが来たのはもう何度目だらうか…

いつもは姉が行くのに…今日は私達一人とも呼ばれた。
スズやアクアは来てはいけないとも。

それも珍しい事だったし、何より…

嫌な予感がしたんだ。

『貴方たちを呼んだのは他でもありません』

時空王が私達に唐突にそう呟いた。

『新たな路線が出来て、未来が少しづつではありますが変わりかけ
ていますね』

そんなの分かりきった事なのに…

その先がどうなるのかも、きっと時空王…あなたなら存知のはず…
私たちはその先の言葉を聞けずにただ、時空王からの話の続きを待
つしか方法はなかつた。

『あなた方を呼んだのは他でもありません』

貴方たちの存在に関する事を告げなければいけないんですからね。
そう呟いたその先の言葉に私たちは目を見開いた。

どこかでもしかしたら…と想つていた。

でも実際にそういわれてしまえば、黙る事しか出来ず…

” 未来が変われば君達は存在しないかも知れない。 ”

時空王の言葉に衝撃を受けた。

『 酷な事をいうのですがね、』

現にあなたたちがいた未来は消滅してしまいましたから。

時空王は一人にそう告げた。

そう、なんとなくわかつてはいた。

良太郎と出会つて、ゼロノスやデンライナーの人達に会つて。

私達の未来に彼等はいないかもしれないし、私達は彼等の未来にい
ないかもつて。

それが現実みをおびたというだけ。

でもなんでだろう、

悲しいという気持ちと、寂しいって気持の方が大きい。

忘れられてもいいなんていわない。

『 ですが、まだ未来は決まつていません。これからどうするかは貴
方たち次第なのですからね』

ゼロライナーが主を求めて暴走しかけてます。

申し訳ありませんが、回収しつつその主を探してもらえませんかね。

「 分かりました…」

「 …はい」

『 では、頼みましたよ』

二人とも。

失礼しますと時空王との会談を終え、ステーションに来るトアクア

とスズが桜井侑斗を捕まえていた。

『あ、おつかえり』

にっこり笑顔でぴょんぴょん跳ねながらアクアが言つ。

『大丈夫？ 紫闇…？』

なんか表情くらいいよ？

『…大丈夫よ』

スズってば心配性ね。

そういう紫闇はいつも笑顔だった。

いや、笑顔を作らざるを得なかつたというのが正解だろ？

「おい、こいつらなんとかしろ！！」

慌てふためく侑斗に諒夏がアクア達に拘束を取る様にと命じた。

「ごめんなさいね、でもどうしてここに？」

「ゼロライナーなら過去で消えてもなんとかなるからな」

時間は掛かつちまつたが…

「…そうね、で、探してたらアクアたちに捕まつたの？」

「…ああ。」

『時の砂漠で彷徨つてたから連れて來たの』

どうせゼロライナーが暴走でもしてるんじゃないかつてスズがいうから。

アクアはあっけらかんとさも当然のように言ひ放つた。

「あいつがまた良太郎にちょっかいかけてるみたい。」「行きましょう。」

「デネブもあっちにいるみたいだしな」

侑斗はゼロライナーに乗りこもうとする。

「待つて…私もこっちに乗つていいかな？」

諒夏が唐突にそう侑斗に言った。

「丁度いい、俺も聞きたい事がある」

乗れ。

「アクア、どうする?」

『私は諒夏と一緒にだよ。』

いつでもどこでもね。

侑斗を観るともう中に入ったのがゼロライナーが動き出しちゃうだった。

『じゃね、スズ。』

『どうせ同じ路線だから

後で会えるよ。』

行こう、紫闇。

「そうね」

行きましょう。

クロスライナーとゼロライナーが走り出すのを時空王は部屋から見つめていた。

『確実に未来は変化しますよ…お一人さん。』

でも、最後の切り札は貴方たちが持ってるんですからね。それを忘れないでください。

時空王の腕には古びた懐中時計。

そして、その机には…一枚の写真が…

光の反射角度で見えはしないが古い写真である事は間違いないく、小

さな女の子が一人、そして男とその隣で幸せそうに笑う
青年が一人…どこか大人びてはいるが面影が…誰かに似ていた。

小

「聴きたい事つてなあに？」

諒夏の言葉に操縦をアクアに任せた侑斗は座り込む。

「お前らは一体何のためにイマジンと契約を交わした？」

「良太郎から聞いてないの？」

「ある程度はな」

「…契約の内容までは覚えてないの。」

諒夏は首をかしげた。

ただ、覚えている事は一つだけ。

「私と紫闇が物心ついたときにはもう私たちはクロスライナーにいたってことだけ」

そこにスズやアクリアがいた。ただそれだけなの。

侑斗は納得がいかない様子だったが、次の話題へと言葉を繋げる。

「あの男は何者だ？」

「カイっていう奴ね、分からぬ。イマジンの世界を作りたいみたいだけど、

今所、有力な情報がないのが現状ね」

「なぜ俺を消そうとしてる？」

「…それも聽かなかつたの？」

「…忌み嫌つてるつての感じたけどな」

それ以上はわからねえよ。

「あの未来の路線が続く場所がきつと関係してんだと想つ

「未来の路線？」

「そう、大人の桜井侑斗が作り出した路線。未来を変える為の決死の策」

「お前…」

侑斗は確信した。

こいつは俺とあいつ（大人の桜井侑斗の事）を知つてると。

「何処まで知つてやがる？」

『「そうね、あの桜井侑斗が護ろうとしてる者と代償かな。』

それ以上はノー・コメントだけど。

諒夏の言葉に侑斗は目を伏せ、壁に身体を預けた。

『「それと…これ。』

諒夏が手渡したのは前も貰つたカード。

『「貴方の記憶もきつと消えていくでしょう、大人の桜井侑斗の記憶だけではもう戦えない』

これからは貴方の記憶も消えていく。
特異点じゃないあなたの大切な記憶も。

「……」

『でもまだすべて変わったわけじゃない。少なくとも良太郎やハナさん、私や紫闇の記憶は消えない』

特異点だから。

すべての者に影響を与える事も私たちには関係ないから。

「…そうか」

『ええ、それに、私達も彼らと同じだから』

「…同じ?」

『未来が変われば…その存在すらなくなるかもしれない』

『だつてお前ら、特異点だろう?』

諒夏の言葉は侑斗に衝撃を与えた。
いや、矛盾を起こしたといえばいいのだろうか?

『そう、私たちは確かに特異点だわ、実際、私達がいた未来が消滅しても存在しているんだもの』

「ちょっと待て、お前ら…未来の人間なのか?」

侑斗は驚きに呆気に取られている。

「…みたいよ。言つたでしょ?覚えてないって。だから聴いた話

時空を統べる王…からね。

未来から来た特異点。

あのハナとかいう女もそうだといつてた。

だが、あのハナという女は早くも影響が出始めている。
結果、あんな小さな姿になってしまったというのに、この一人には
その傾向はなさそうだ。

「一体どうなつてるんだ？」

『未来が変われば…すべては変わる。』

今まで存在していた未来は変わってしまった。

でも、

『きっと良太郎は変わらない。』

強くはなるだろうけどね。

本質は変わらないから…

『だから、あなたもどうか見失わないで…』
絶望に支配されないで…

諒夏の言葉に侑斗は静かに頷いた。

『りよおかあ～～、そろそろ着くよ～～』

車内放送でアクアの声が聞こえる。

きっとあのカイとかい男もいるだろ？

「アクア、すぐ準備して。」

『りよおか～～い』

諒夏は侑斗を観て数枚のカードを取り出した。

『私がしてあげられるのはこのカードを渡す事だけだから』

「これは…一体何のカードだ？」

『記憶を失わないカード。失われた時間を取り戻すためのカード。』

そして、あいつが読めない…切り札の為のもの。

『あなたを排除する事があるカイとか言つ男の目的なら、全力で阻止するだけるもの』

未来は変わつてもハッピーエンドは変わらないってね。

そうじやなきや、良太郎が許さないでしょ？

諒夏の言葉に侑斗は苦笑いを浮かべた。

「確かにな…」

『じゃ、頼んだよ。』

桜井侑斗君。

作られた未来はいらない。
悲しい歴史はいらない。

自分に出来る精一杯の事をすればいい。
たとえ、それが自らの存在を消す事になつても…

『諒夏あ～？』

『ーしたの？

ゼロノスが走り去った後、クロスライナーに戻つた諒夏。
良太郎が変身してあいつら一匹を倒してしまつたので変身する暇もなく、紫闇達はクロスライナーで時空を走つていた。

座席に座り、外を見つめる諒夏にアクアが近づく。

「つづん、なんとなくさ、いつまでこつしていらっしゃるのかなって
ただ想つただけ。

『…諒夏…』

「ん？」

『忘れないから…私』

馬鹿だけど、絶対二人の事私とスズは覚えてるから。

「ありがと、アクア」

『えへへ』

頭を撫でられているアクアを見てスズは想う。

”消えるなんてこと、絶対にさせないから…”

紫闇もさつきから上の空。

きっと原因は諒夏と同じだろ?と思つ。

忘れられるのは悲しい事。

そして消滅するかもしれないって聞いたんだと想う。

でもそんなの、僕達だって同じ事だし、きっと消滅しても忘れない
よ。

『ねえ…紫闇』

「なあに?スズ…」

「一ヒー飲まない?」

「…貰おうかな。」

『了解。諒夏もどう?』

「コーヒー飲まない?』

「あ、カフェオレがいい』

『私も～～vv』

いつもカキ氷しか食べないアクアがコーヒーを飲むと言い出した事に三人は驚く。

『なによお～～。』

「いや、アクアもコーヒー飲めたんだ…』

知らなかつた。

『普段は飲まないよ～～。でもカフェオレは飲めるんだ～この前諒夏に貰つて飲んだら飲めた～～』

だから平気なの～～。

につこり笑顔のアクアにどうでもいいようなスズ。

「そつか。』

じゃ、カフェオレ2つにブレンド一つでよろしくね、スズ。紫闇の言葉にスズはキッチンに向かつて歩いていった。

準備をしながらスズは想う。

”一人を消す未来なんていらない。”

僕等が消えるのはまだしも、あの一人を消す未来なら…

変えてみせる。

僕らの契約だから。

契約者との契約はイマジンにとって大切だから。
なんとしてもかなえなくちゃいけないから…

未来が変わつてもそんなの僕らには関係ない。

君達とどれだけの時間を過ごしてきただけだから。

絶対に変えさせないよ…悲しい未来なんていらないんだから…

『あのカイとかいう男の事…調べられないかな?
スズ…』

いきなり近くに来たものだからスズは驚きの表情。

『脅かすなよ…アクア。』

『ん~、で、どう?』

調べられないかな?

『……やってみるよ。』

アクアは?

『ん~、とりあえずあの桜井侑斗の大人の方…監視しどぐ。』

だつて危ないじゃない。

『じゃあ、そつちは頼んだよ。』

もちろん、二人にはばれないようにな。

『りょおかいへへ』

悲しい未来なんて…

いらない、見せたくない。

あの一人の悲しい顔なんて見たくないから…

だから僕達が…

だから私達が…

貴方たちを必ず護るから…

変わり行く運命（後書き）

これからどうなっていくんでしょうね？

桜井侑斗（大人）と青年の桜井君。

そして、スズとアクアの契約者つて？

時空王は一体誰の事言つてるんでしょうね？

スズとアクアの苦手な人（前書き）

突然、ステーションに現れた謎の女性。
駅長室に入り、駅長をも困らせるその女性とは？

スズとアクアの苦手な人

『…これは…困った事になりました…ねえ』

ステーションの駅長は冷や汗を搔きつつ、田の前の相手に視線をやる。

『いいから、さっさと呼んで頂戴』

田の前に居る女性はふうと頬を膨らませて駅長をじらむ。

『一応連絡はしてみますがね…』

来るかどうかは相手の方次第ですよ?
そういうつつ、近くの受話器を取つた。

数分後

『一応伝えましたよ。』

『で来るわよね…。』

来なかつたらどうなるか分かるわよね。

とでも言いそうな女性に駅長は苦笑いを浮かべた。

『今は学校の時間らしいですから』

ここには来られないそなんですよ。

『ならクロスライナーを呼んで頂戴』

それなら呼べるでしょ?

つつか呼べますよね？

駅長さん。

にっこり笑顔を浮かべているが、実は笑ってない。
ちょっぴり額に怒りマークが…。

『…まあ、呼べない事もないんですけど…』

『呼んで頂戴。』

お願いします。

言葉ではそう言っているが、駅長にはそりは聞いちゃう。
冷や汗をハンカチで拭つてしまつほど…

所変わつて、クロスライナー。

『……つていうか誰から?』

アクアが受話器を戻したスズに向き直り、スタスターと席に座った。

『スズ?』

『…………た』

『ん?』

誰?

『あのお方だよ…』

『あのお方?』

誰よ、それ?

首をかしげるアクアにスズは慌てふためく。

『あのお方だよ!…忘れたのかい?アクア…あのこわ〜〜い方!…スズの慌てぶりに目を見開くアクア。

『マジで!?』

つていうかあの世界消滅してないつけ?
驚きに呆然とするアクア。

『さうだよ、そのはずだよ、だからいる訳がない、そのはずなのに

…』

今電話があつたんだよ。

『うつそ…マジで?』

つていうかなんて答えたの?

ねえ、スズ。

『一応一人は学校行つてるからつて断つたけど…』

あの様子だときっと、いや、絶対クロスライナーに乗り込んでくる。

『やばくない?殺されちゃうよ〜〜』

『でもステーションをのつとられてるみたいだし。』

『……良太郎にもあんまり合わせないほうがいいよね?』
つていうか絶対。

『だよね、一応、アクア、ゼロノスと良太郎をなんとかライナーに
戻さないように伝えて』

『それから紫闇と諒夏もだよね』

『『よし!』』

二人は今までにないくらい瞬敏な動きで行動を開始した。

所変わつてゼロライナー。

『はい？ もしもし？』

『もしもし、『デネブ』？』

『あ～、アクアさん。』

どうかしました？

『デネブは受話器越しに』それで？』とか『ハア。』とかをつけ、受話器を置いた。

「デネブ…誰からだ？」

丁度、ゼロライナーで昼食中だった侑斗。

デネブが考え込むのはいつもだが、最近はありますぎて逆に不自然な行動だつたらしい。

『いや、それがね…』

デネブはアクアから連絡があり、至急侑斗に諒夏と紫闇の元に行つて欲しいといわれたことを告げた。

「何で俺が行かなきゃいけないんだよ！」

俺は行きたくねえ。

そういう侑斗にデネブはん～と考える仕草をした。

『なんか、やばい事が起きるからって』

言つてたんだけど…

『やばいことってなんだよ』

『未来が変わるとか…』

『未来が変わる？』

『たぶん、電妃としての何かだと想うんだけど…』

「……」

それ以上は分からぬといつたテネブ。

侑斗はもつていた茶碗の中身を急いで食べ終え、口元を布巾で拭う。「で、何処行きや逢えるんだ？」

『もうすぐ停車時間だから、そこから數十分の……』

場所の説明をすると侑斗は「わかった」と言つてその場を後にした。

同じようにデジンライナーでは連絡を受け、良太郎が出かけていく事になった。

所変わつて、諒夏と紫闇の学校前。

『つてことなんだ、悪いけど、一人を合わせるわけには行かないか

らさ『

そつちでなんとか頼むよ。

スズに言われた紫闇から事情を聞いた諒夏。

「でも誰が来るんだろうね？」

桜井さんじやないみたいだし…

「時空王でもないわよね。」

つていうかあの人はあそこから動かないものね。
「でも待ち合わせがなんで遊園地なのかな？」
「さあ？」

紫闇達は学校帰りである。

もちろん、大學なので私服だ。

だからおかしくはないのだが…

「つていうか初めてだよね。たぶん…」

遊園地とかつて。

「…そうだね。」

来た事ないもんね、うちら。

いまさらなことに気づいた一人。

遊園地で見かける親子連れ。

でも一人にはそんな記憶さらさらない。

あどけなく笑う子供を観る一人…

その視線には少し羨ましさが見えた。

「とにかく、一人が来たら中入つてみよ?」

「ね、姉さん。

「…そうだね。」

苦笑いを浮かべる紫闇。

そして、それに笑顔を浮かべる諒夏。

『あ、お——い。』

手を振る良太郎。

その横でぶすつとした侑斗。

「二人とも遅いよ～～」

「つていうかいつになくぼろぼろだね、良太郎君」「またなんかあつた？」

普通の侑斗とは対照的に服に所々砂がついていたり、破れていたり……

「野上の奴、つぐづく運がない」

毎度の事だけどな、さすがに。

侑斗は諦めているようだ。

「あはは……まあね。」

とにかくここに居ても仕方ないし、中入るうか。

良太郎の言葉に一人は頷き、侑斗もそそくさと着いていった。

未来が変わるものどういふことだ？

聴きたい事は山ほどあるけど、今はこいつらについていくしかない。
侑斗は少し肩を落として自らを落ち着かせた。

所変わつて、クロスライナー

『よつこいや…』

駅長のところに着いたスズとアクア。

二人が来たことによく開放されると想つたらしく、安堵のため
息が聞こえた。

『お待ちですよ。』

お一人を。

『……お久しぶりでござります』

スズが口を開くとむすつとした女性。

『貴方じやなくて、二人はどうしたのかしら?』

『…それが、二人は友達と出かける約束があるつてさつき連絡した
ら言つてまして…』

アクアもいつもとは違ひ、ちゃんとした口調だつた。
それだけでこの女性がとても二人にとつては目上の人という感じで…

『まあ、二人は無事なのね。』

『ええ。契約は続行中ですから。』

『…そう。』

ほつとしたようなその女性の表情。

『一人が無事ならいいんだけど。』

ちゃんとご飯食べてる? 病気とかしてない?

色々と質問を続けるその女性に「一人はあたふたしながらも一人の近況を報告し、

女性に気を遣つて言葉を続けた。

万が一、二人の住んでる所を見たいといわれても大丈夫なように良太郎と侑斗を追い出したし、
部屋も片付けた。

そして、クロスライナーだけ、別路線を今走らせている。
デンライナーとゼロライナーとは別の路線を。

『そお、安心したわ。』

あゝよかつた。

笑顔をよつやく浮かべた事に安堵するスズとアクア。

『お方様も早く戻らないと夕方の仕込み…できないんじゃないです
か?』

アクアがもつともらしい事を告げるとこり笑つて持つていた紙袋を差し出す。

『そつなのよ、で、一人にこれ、食べさせてあげたくつて』持つてきたの。

入っていたのはタツパーが四つ。

……『こっちがシチューで、こっちがカレーね、それでこっちが煮物で

-
-
2

ニニガツ川ヰヤベツ

さつきとは打って変わらず笑顔の女性にアケアカ素直にそれを受け取った。

『

卷之三

『いいわ、今度は一人に逢いに来るから』

駅長さんもお邪魔しました。

笑顔で去っていく女性に一同、ドアが閉まつたと同時に座り込んだ。

駅長と一匹のイマジンが倒れこんだとは梅雨知らず、その女性は笑顔で未来行きの列車に乗り込んだ、

『助かりました』

駅長の言葉にスズとアクアが苦笑いを浮かべる。

『僕らも助かりました』

『それにしても…』

消滅したはずの未来にいた女性。

でもなぜか未来に存在し続いている女性。

そして、アクアやスズと契約の事まで知っている女性。

『時空王の差し金かな?』
これつて。

ね、スズ、どう想つ?

『ボクに聽かないで……』

お願いだから…

頭痛くなってきた。

頭痛がすると額に手をやるスズ。

『駅長、時空王から連絡は?』

『いえ、聴いていませんよ』

『ふう〜ん、じゃ別件かな?』

『それにも… それどうするんですか?』

『ここにおいていかないでくださいね。』

一概にそういうわれ、アクアは手元の紙袋を凝視。

『スズ… どうしたらいい?』

『… 折角だからテンライナーに持っていくか。』

犠牲者は僕達じゃないほうがいいよね?

『そうだね、それに諒夏たちもきっと居るだろ? し。
でも、夢壊しちゃうかな?』

”お母さんがこんな作る人だつてわかつたら。”

アクアの言葉にスズは苦笑い。

そう、あの女性は実は諒夏や紫闇の母。
契約した時に消えたはずの二人の実の母親。

『未来が変わつて…』ということですかね』

『たぶん、分岐点が変わつて、でしうね。』

あのお方は消えなかつた未来があるといつ事。

消えた未来にいたはずの人間が居るといつ事は、別の未来から来れ
たつてこと。

そして、その原因を作つたのは一人。

桜井侑斗だ。

『変わり行く未来があるといつのは別の視点から考えるとともい
いことなんですよ。

でもそれをいいとどるか、悪いと取るかはその人自身の問題です
けどね』

まあ、破壊されずに済んで今回はよかつたですね。

『迷惑をおかけして申し訳在りませんでした。』

『いえいえ、実質的な被害はなかつたわけですし。』

どうということはなかつたということで。

駅長の言葉にスズ達は苦笑いするしかできなかつた。

そして、その日の夜、デンライナーに2人が持ってきたモノを観た一同が目を見開いた。それがどうしてなのはかは、別の機会に…

スズとアクアの苦手な人（後書き）

実はアクアとスズの契約者の母親。
つまり、紫闇と諒夏の母親なんです。
口調で誰だかわかるかもしませんね。

しかも侑斗と良太郎に会わせたくないというのがヒントです。

異点（前書き）

クロスライナーである女性が居る頃、紫闇と諒夏は良太郎と侑斗とともに遊園地にきていた。

二人ともはじめての場所に戸惑いながらも一人と会話をする。

そこで新たなる疑問、そして矛盾に気づく

異点

遊園地…なんて始めてと咲く一人。

「そう…なんだ」

ちょっと意外かも

良太郎の言葉に2人は首をかしげた。

「いや、女の子ってこういう所好きだと想つてたから

「…例外はいるけどな」

侑斗の言葉にそれが誰だかわかつた三人。

もちろん、それに侑斗も含まれるが…

「とにかくさ、色々乗ろう」

せっかくだし。

良太郎が沈黙を続けさせないよう言葉を続けていく。

最初に乗ったのは絶叫マシーン。

良太郎以外は普通な顔。

次に乗つたのはコーヒーカップ。

良太郎は落ちてくるくる回る所を必死に立つていた。

そして、次第に良太郎がため息をついてふらふらになる頃…
観覧車に乗る事に…

「ちょっと、良太郎君、大丈夫？」
紫闇の支えでなんとか乗る事に成功。
それに続いて侑斗、諒夏と続いた。

「で、聞きたい事がある」

侑斗は扉が閉まると同時に腰掛、座る一人を見つめてそう告げた。

「何かしら？」

「お前らは未来から来たんだよな？」

「え？ そうなの？」

良太郎は初耳だつたらしい。

「そうね、そうなるわね」

紫闇がそう呟いた。

聴いた話というのはあながち間違いではないようだ。

「で、聴きたい事ってなあに？」

「お前らの事、つまり未来が変われば存在しなくなるつて前にお前
言つてたよな？」

諒夏をじっとみてそう呟く。

「ええ、そうね。」

「それはどういう意味だ？」

「どういう意味もなにもそのままish？」

普通に考えて。

紫闇の言葉に侑斗が苦虫を踏み潰したような表情になる。

「未来が変われば私たちは存在そのものがなくなる可能性のほうが高い」という事

ただそれだけ。

紫闇の言葉に良太郎が今度は声を荒げた。

「そんなん…」

まだ決まってないじゃない。

だが、紫闇や諒夏は外を見つめ、淡々とした口調で呟いた。

「決まってるの。私たちが居た未来が存在しない、いつ居なくなるか分からない」

だつて存在そのものが不安定なのだから。

「だが、特異点なんだろう?」

お前ら。

侑斗の言葉に紫闇が頷く。

「誰にだつて、何にだつて例外はある。」

今が存在するのも異点なのよ。

「私達が教えられた未来ではない、もう路線の近くまで来ているんだもの」

だからあのカイツ青年だつて焦つてる。

諒夏の言葉に良太郎は首をかしげた。

「カイツっていう青年が持つてるのは默示録。」

つまり、過去、現在が見える物。

諒夏が淡々と答える。

「そして、その默示録に存在していくてもそれを変えようとするモノ、それが桜井侑斗」

「ねえ、その默示録って一体…?」

「良太郎君、その出所さえ分かつたら私達だつてこうしてないでしょ?」

紫闇の言葉に良太郎は思わず黙り込む。

「つまり、あの默示録は現在と過去を結ぶ物だつてことは分かつた。

「だが、なぜそれが俺とかかわりがある?」

侑斗の言いたい事ももっともだ。

「桜井侑斗だけが変えられるからよ。ゼロノスである彼だけが…」
すべてをリセットするという意味を持つゼロノスという存在だけが異点。

そして、それをサポートできるのは電妃。

「でも実際の所、私達も実感も証拠もないの」
話を聴いたのスズとアクアに。

そして、時空王。

「前から言つているな…」

その時空王というのは何者なんだ？

なぜお前たちに干渉する？

侑斗の疑問は最もだつた。

良太郎でさえ、逢つた事がない人。

そして聞き覚えのない人…

「時空王は時空の狭間に落ちていた私達を拾い上げたと聞いてた。
でもそれだと矛盾が起こるの。

紫闇はそう呟いた。

「矛盾？」

良太郎は首をかしげる。

「ええ、一つは私達とスズやアクアの契約。これは小さい頃に行わ
れた物だというのも矛盾」

小さい子に何を欲しいかなんて聞いたってたかが知れてるでしょ？

「それを一切覚えてないのも不思議。」

そして、私たちの両親の話を一切しないの。

時空王も…そして、スズたちも…

紫闇と諒夏の言葉に2人は首をかしげた。

「イマジンのやつらに聞けばいいんじやないか？」

あのスズとかいう奴ならまだしも、アクアとかいうイマジンはしゃべりそうだが？

侑斗の言葉に諒夏は首を横に振る。

「答えてくれないの、ただ、あのお方だけは怒らせると怖いって」

ただそれだけ。

「怒らせると…」

「怖い？」

良太郎と侑斗が顔を見合わせる。

「それに、一つ気になる事もあるのよ」

諒夏の問いに観覧車を降りた3人が振り向く。

「未来で確実に何かが変わってる、そしてその分岐点である桜井侑斗、でもそれって違うんじゃないかなって」

最近想うの。

諒夏の一言に良太郎は「どうこう」と呟いた。

「考えてみて？桜井侑斗が過去を飛び回るのはどうしてだと想う？」

そもそもイマジンが居る時間に必ず居る。

「それは…」

良太郎もそこにはずっと引っかかっていた。

どうして桜井さんは過去に居るのか…

そしてなぜ、自分たちの前から姿を消すのか…

『うつして侑斗にカードを渡し続けるのか…

「謎はあるわ。あのカイとか言つ青年がいつ、分岐点がもし桜井侑斗じゃないとしたら？」

誰かが未来の路線に繋がる分岐点の鍵だといつの？

紫闇の言葉に一同止まる。

「とりあえず、桜井侑斗の事はこちらでなんとか調べてみるわ。」

今日は楽しかったわ。ありがとう。

紫闇と諒夏はクロスライナーに戻る為に更衣室に一室に入つていつた。

「ちゅうびクロスライナーではお客が一人降りる所だったよつで…

『あ、おつかえり～～』

アクアがにつこり笑つて何かをほおばつてゐる。

「ただいま、何食べてるの」

『ん？ わらび餅だよ～～』

諒夏も食べる？

差し出すわらび餅に諒夏は口を開けた。

「ねえ、スズ、聞きたい事があるの」

紫闇の言葉にスズはコックピットへと誘つた。

した。

「私たちに何か隠してない？」

『…別に何も隠していないよ?』

変な紫闇。

どうしたのさ。

「私達をあの場所に誘つたのも何かの理由があるわけでしょ?」
帰つてこられるとまずい事が…

紫闇の言葉にスズはため息を一つ。

『考えすぎだよ。整備してたんだ、クロスライナーをね。』

「ここを?」

『ああ、観て、新たな路線がもうすぐ繋がる。』
その前に少しパワーアップさせておかないとな?

そういうスズはいつもと同じように見える。

だが、なんとなく違和感が纏わりついて…

「なにかやつぱり隠してる」

何年一緒に居ると想つてるの?

これ以上何か嘘を言つたら許さないといつよつな紫闇にスズはため
息を一つ。

” なんで知られたくない時にばかりこう鋭いんだろう… ”
と。

『……新たなる路線からお客様が来たんだ

「お客様?」

『今はまだ逢わせたくない人。でもそのうちきっと逢わせるから…』

だから、それまで待つてくれないかな?

そう呟くスズに紫闇は納得行かない様子。

だが、ここまで来て、それでは引き下がれない。

「どうこいつとなの？スズ…ちゃんと説明して。」

『…時はまだ…満ちていなーいから』

教えられない。

スズがゴックピットを去った後、紫闇はただ、新たな路線をそこから眺めていた。

廊下で立ち廻くスズ。

『めん…じめんなさい…紫闇。

でも、逢つてしまつたら、キリ達はまきつと選んでしまつ。
最悪の方法を…

そして、知つてしまひ…

この世界の異点が桜井俺斗ではないことにこいつを…

そして、知られてしまつてはキリたちが消えてしまつ。
だから、教えられない。
知つて欲しくない。

キミタチヲウシナイタクナイカラ…

契約なんてどうでもいい。
キミたちを護れるなら…

あんな未来なら…

変わった方がいいんだ。

スズはただ、クロスライナーの車窓から流れ行く景色を見ながらそう想っていた。

異点（後書き）

どうでしょ'うね？

侑斗は知ってるけど、いえないみたいな感じですね。
つていうかたぶん聞いていてもその時間に行きたくないっていう感じです。

そして、スズ、知られたくないんですよ、きっと。

知られたる過去（前書き）

カイという青年によつて変わる未来…
だが、分岐点となる者の存在を知り、それをフェイクしていた桜井
悠斗。

その事実を知つた時、電妃の一人は…

知られざる過去

…なるほどね。

イマジンとしてテネブを選んだのも…時空王の仕業だったわけなのね。

紫闇はその一部始終を見て、そう想つた。

テネブがカイを裏切る事を見越し、そして、彼らと出会わせた。そして、少年である桜井侑斗に戦わせる事も。

「諒夏も私もずいぶんと遭われたわけか

「…紫闇…」

「良太郎君もなんとなくわかつたんじゃない?」

そして、未来への分岐点も繋がる…

彼の記憶云々では。

「どうするわけ?」

具体的に。

「とにかく、大人の桜井侑斗に逢いましょう

それから、諒夏に連絡を。

踵を返し、クロスライナーへと歩き出す一人。

” 少なくとも…この時間のあの方はご存知と言つわけか。

”

そして、必死に護ろうとしてる桜井侑斗も。本当に時空王も憎い演出をしてくださる…スズは空を仰ぎながら心の中でそっと呟く。

クロスライナーが到着後、すぐドアが開き、中に入った一人を待つ
ていたのはア
クアだつた。

「アクア、諒夏？」

「あ、おつかえり～～」

アクアが手招いている。

そこにいたのは大人の桜井侑斗。

「…貴方…」

「さつき、拾つてきた」

えらい、ねえ。

アクアがっこり笑顔を浮かべる。

「…じゃあ、あなたはクロスライナーで？」

助けたつて事？

紫闇の問いにアクアはこつと笑顔を浮かべる。

「…相当のダメージを受けてるけどね、でもカイが気づいたみたい
本当の分岐点が誰かつてこと。」

「…そうみたいね。でも大丈夫よ。」

そのために彼、傷ついても過去へ行くつて。

「…そう。」

今は倒れている桜井侑斗。

それに愛理さんが何か知ってるみたい…

紫闇の言葉にスズとアクアが目を閉じた。

時は一刻を争うか…

桜井侑斗を過去の時間で下ろした後、スズとアクアが紫闇と諒夏の前に座る。

「…あのね、話さなきやいけない事があるんだ…」

スズがそう切り出した。

「なあに？突然」

それに諒夏と紫闇は首をかしげる。

「まじめに聞いて欲しいの」

あのね。

アクアが珍しく本気口調なのは重大なことなのだろう。

そういう時以外、まじめにならないから…

「未来が変わりつつある…って事は知つてると想うけど…」「それに、もしかしたら貴方たちがいない世界かもしれない」
その未来は…

でもね、愛理さんが言つてた言葉…

『過去が希望をくれる』

その言葉は、時空王が言つてた言葉なんだよ。
アクアとスズの言葉に眉をしかめ、驚く二人。
「一人に逢わせる必要が出てきたんだ」
どうしても、もう一度、時空王と。

「どうじつ…」と…

時空王と逢わせるとか？

私達が消えるとか？

愛理さんの言葉が時空王と同じとか…

「説明してよ、スズ…」

「一体どういうこと?」

「…僕達は契約したんだ…」

幼いキミ達ではなく、主と。

「…契約?」

私達じゃなくて?

「…話さなきやつてずっと想つてた」
でもいえなかつた。

全然未来は変わらなくて…

もしかしたら過去の二の舞になるんじゃないかなって。
特異点の二人なら大丈夫だろうけど…

でもそれでも予備を残しておくに越した事はなかつたから…

『…アクラ…スズ…』

声が聞こえた…それは桜井侑斗の声だった。

「…お帰りなさいませ」

「…やつぱり変わりませんでしたか…」

過去は…

『…ああ…』

そういうと椅子に腰掛ける。

「一人にはボクから話そう

『…すみません。』

「幼いお前たちを拾つたのは時空王だ」

「…私たちを拾つた?」

桜井侑斗は語つた。

自分が過去での力イという奴が連れていたイマジンに負け、過去

が消滅した時

、愛理の記憶と共に時空界と

つながり、そしてあの時自体を時空王が止めたこと。

そして、あの時、すでに愛理のお腹には子供がいた事。

「…もしかして、それが…」

紫闇と諒夏が顔を見合わせる。

「私達？」

「…双子だと聞いていたからまず間違いないだろ？」「

「じゃあ、なんで…」

「あの時間が消滅したらキミ達は生まれない…そして壊れてしまう

から…」

だから頼んだんだ。

自分の代わりにあの一人を…と。

「私たちの名前を…託したのも？」

紫闇が神妙なおもむちでスズを観た。

『…そうだよ、桜井侑斗の…彼の言葉と時空王の意思』

僕らは声を聞いただけだけど…

”俺達の子供を助けて欲しい…”

”悲しい過去はいらない、悲しい歴史もいらない”

必ず、変えて見せるから…だから…

どうか子供達は奪わぬいでくれ…

「その願いに乗じて時空王はキミ達にクロスライナーをくれた。」

そして、彼らも。

『私達の手のひらに降りてきた子供達…』
そして天使と思い描かれた私たちの身体…

契約は貴方たちを護る事。

何者からも、護る事。

「良太郎と会つたのは？」

「アレは…過去が変わりつつある現状でそうなつてしまつた」
良太郎君には悪い事をした。
もちろん、過去の自分にも。

「デネブに願つた事つて…」

「桜井侑斗…俺自身の過去の自分を助け、戦わせる事」
それ以外に変える方法がなかつたから…

「じゃあ、私達は…」

良太郎とは従兄弟になるの？

「…そうなる。」

「でも電王の妃つて…」

言つてなかつた？

従兄弟なら血縁関係があるから妃には必然的になれない。
なら、なぜ？

「電王の妃というのは間違いない。電妃…それが異点となり分岐点
の一つの鍵と
なつてるのだから」

桜井侑斗が言つてる事がわからない。

それなら電妃という存在価値…
そして意味がない。

「分からなくなってきた…」

紫闇は頭を抱え、諒夏はぽかーんとしている。
「次の乗車駅で…逢わせたい人がいるんだ」
桜井侑斗の言葉にアクアとスズは目を閉じた。

そう、結末は変えなきゃいけない。

それがもし、自分たちを消す事になつても…

そして、紫闇と諒夏に逢えなくなつても…

もう過去は変わる方向に向かつてゐる。

そして、未来も…

二度とつらい思いをさせないために…

”たとえ自分たちが消えても…”

あなたたちを護るのは契約だつたからじゃない。

私達がともに過ごしてきた時間、すべてが大切だから。
護りたい…

ただ、それだけ。

そして…どうか、

幸せに…

それだけが私の願いだから…
ボク

知られざる過去（後書き）

桜井さんと二人の関係…、そして時空王という存在。

絡まって…絡まって今の関係があります。

そして、二人のイマジン。

契約って？

そして…物語はクライマックスへ近づく

めぐらしつかで……のめりがあつてゐる氣がしました。

めぐらしつかで……のめりがあつてゐる氣がしました。

めつとにつか・・・むいかで

過去…

現在…

未来…。

時の砂漠と呼ばれる世界を走っているクロスライナー
そんな景色、見慣れているはずなのに、なぜだらう、不思議と居心
地が悪い。

奇妙な違和感。

その正体はさつき言われた言葉。

桜井侑斗が自分達の父親だと。

そして、母は野上愛理。

信じられなかつた。

いや、信じたくなかった。

だが、それで今までつじつまが合わなかつた事にピースがうまつた
ような気持ち、

でもまだしつくりこない。

長い間そうだったからかもしれないけど。

「父親と母親か・・・」

紫闇と諒夏は車窓から外を眺めつつ呟いた。

桜井はといふと、コックピットからクロスライナーの先を眺めていた。

あんなことを言わない方がよかつたかも知れない。
帰つて一人を混乱させてしまうとわかつっていた。
だが、言わずにはいられなかつた。

未来が変わつたら一人は…

だけど、もう一人特異点がいる。
例外がないわけじゃないんだ。

…デンドライナーのハナさん。

スズとアクアにはなんとなくだが判つた。
あの子がいる未来は消滅した。
それは諒夏と紫闇と同じ。

でも、あの子だけが違う事…

そう、あの子も桜井悠斗と愛里の子だ。
未来の…

諒夏と紫闇とは違つ別の未来の子供。

そして、変わり行く未来の本当の鍵。

二人は消える…

未来に彼女たちの姿はない。

なぜなら…一人がイレギュラーな子だから。

破滅の未来が生んだ物。

それが二人だから…

「アクア…」

「スズ…」

どうしよう…

二人のイマジンはたそがれた。

時は刻一刻と二人の消滅を待つていてる。

あのカイとか言う男もイレギュラーな人物。
アクアはあのカイっていう男に逢った途端その事がわかつてしまつた。

イレギュラーな人物。

存在を許されていない物。

過去に影響を及ぼす悪意的なものを持つ者。

そして、イマジンを動かし、未来を破滅へと向かわせる言わば先導者。

だけど、未来はもう決まった。

この時代の野上愛里と桜井悠斗によつて。

そして時間を変えるという禁忌を犯し、その罪を背負い消えていく
桜井悠斗の存在。

そして消える、一人の子供…諒夏と紫闇。

時空王といつ存在。

「どうする事も出来ないの？」

アクアが必死に言葉を紡ぐ。

だがどうする事もスズ二だつて出来はしないのだ。

未来はもう選択されている。

そして、道は繋がつてしまつているのだ。

もう路線は変わらない。

未来も…

「あとは時間との勝負だね。そして、僕らはただ一緒に居るだけ」
違う？ アクア…

スズの言葉にアクアは泣く。

涙なんてないはずなのに…

それでも目から溢れてくるのは涙…

イマジンのはず…

消えるだけの存在のはず…

だけど… だけど…

「二人は…どうして…生まれてきたんだろうね？」
幸せになる為じゃないの？

ねえ、スズ…

「アクア… 最後まで一緒だよ。僕も、紫闇達も…」

二人だつて幸せだったはずだよ。

それに、決めたろ？

ボク達が二人を預かつた時に…

『この一人を護つてみせる』って。

「だから、どんな結果でもいいじゃない

だろ？ アクア…

スズの言葉にアクアは涙を必死に拭いながら頷いた。

そう、後は僕らの出番じゃない。

未来が決まった時、そして、桜井悠斗が消えた瞬間どうなるかなんてわからない。

でも、きっと未来はどこかしら変わってるから…

もしかしたら一人は消えないかもしね。

そんな望みを持つて…

か、
な
い
と
か
..

めつとこつか・・・むいかで（後書き）

彼女たちは消えずにはいますが、未来で会えるかは疑問?
だって消えちゃったし、違うし… イレギュラーだから。
だからこんな終わり方。
今までありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5644c/>

仮面ライダー電王

2010年10月13日21時13分発行